桃浪記游

一卷

特別
イ4
1919
1

176306

白雲山に登るの記

今茲明治十三年の夏東京なる都より故ありて信濃
と上野と越前田の駅を過きて白雲山にのぼりて
岩手の地面のものみな優りて峻嶮奇絶なる
さまなりけれども夏の初の我山のいと怪しき
に雲霧千尺の岩屋にこもりて禁えたるうち西山なる例の巫覡
とりの話りて禁えたるうたきまでふ覚えしのもひと
里強のいの姫なさふ具の前庭のいそのれく弱りたし
くも果てて少如うくて三十日を経ぬるに白雲
山の大人と話ひて初泉の経界を捉けて再

38- 8830

上京あさんとて又杉井田の駅につきぬいては
なひとを知るとあるを大人の許をもく諸家の野
雪とて見し果りしるに下僕い芋ふけんとうふと供し
九日九日の彩菊明に旅装〳〵ゐ馬つい駅を西へ
折れいりたるさるよ一軒の裏伝ひの中庭掘とりふ
掘を浚ひ手所まるのうちもいきたるんと見へきに
枕を撫るとあるとあるれぬ　を擡げて彼男を望め
ば奇観筆舌もて尽し難し面みる中て立ち強く天を
清朝あれば奇秀異景久露れて暮色の美き
云へんとるなし　紫きるよ先の奥行て唯上さま
のを祝ひひるるよ学ぶ十二三下ひまる事

んとるを妙義の町へ祖あるなるめ出るよ一傍ら
坂路あり　路窮へついと壮大なる黒門行はれ
妙義町の口ひの門内人家三千余軒ありて
其日六七軒八幡宮なるへ〳〵絃歌の聲いと喧
へんなり逆旋ヒまへ宏壮麗なる酒地なる
へるとも黒門れをせし上の香花殿〳〵畑のゐる時
うみあり香客の地平よ節を駐むる多きことを
蕎麦屋もあるを　町の北の高い尾燈穹窿
其上に一大社ありこれ妙義神社なり石燈をまて
燈るふ先へ大ようゆうなる華表を仰ぐ白雲ふ
と題する扁額掲ぐ初時家庭を奉立する祈

太宰府白雲山と詩ありとて洲の数えられしるも
のなりしを又れの山とも辨えなくてなりしるふこと
初めて中山のとなりなりと悟りなれて奥情殊にいや
ましぬ石表の白元亀傑閣巍然として金碧
燦煌人目を奪ふとれ妙義神社なり拝殿
なりしぬ義の所なり旅亭のうて一酌導者に
得たるなり行れの山に左も清水冨士なるめるる
導者曰岩石の幽怪なるに中に岳なり
めるもの如し里程を問ふに三里を過ぎといふ別ち
徐ろにて猶繁一市街を西に抜れて行くこと四五丁
ふく谷山の抱(図)して釜体のごとき出れ

て洲暑いとなく歩むに勢ひ疲れ難き
導者ともに憩ひ休ねあれば後ふ左に白雲
山屏障のごとく青立て左手に金鈴山雲を清き
蝸牛岩と名付て叡立して西に導
者顧みて指す中に岳を彼方蝸牛岩の如し
あるとして歩むに筆腸なる山路を照回する
小歩一歩ふるく路岨なりしかと一里
計にして稍く中に岳の麓より拝めたるの巖石
珍瑞玉のごとく皆ふ用ふるに見のされを
名接の遑なく又二三丁計り行くまるに
計にて一巖石の此然として回を遮ることなる

月の澤先生の名を駭くいくばくか是なん中
ヶ岳四門の第一門なり多の澤之門而山山而石其
高き数百仞如垂天之雲瓦然獨立寔門也と
立つて音を数くうた余此石門を夢寐にも
千歳幾年人もや初めて岩屋に対し却て辞
七拾く主従互に恍然たるのみうてまた禁慎
てれくみ怪岩奇石樹木の間に出没し絶景
筆に描難くこの岩壁の窮まるを知らず
不算の高を凌て真立たるを下に一宇の
草屋行りて憩に寄せ是家にて
外にはまた中ヶ岳の金図を繙くまとなりし

今もいつかを知らを知ると問を待ひ
をよきもの多とうち欣ひて主人に絵図を求
めとなりと計らそまかくくくもせをいと惜
きことを思ひく夢義の多ものもなく空と割て
雲をくひれいるくくこの地に遊ひなのを探くて
るくを論ず書を考ふ便を請と位をくをなかり
れ一本を惠とてよと切ふをくども高を守を
夢の図をそをもの多
せめをもの思ひ多て額をせる図をかをん
とうくくの像を推て聞くを手面に一面の額いり
みかるくの多のの跡をや いを鮮に写まて

景致言語に尽し難し山勢逶迤林木蕭疎煙霞万
物精神を密収して一瞥して悉く金山の景眺悉
く眼中に入る蓋し是れ実に神仙の勝槩を占駐
神怡ぶ国の広く広くして尽くしまして語って余す
ところなき大なり金屏紙横に切り開きて大きく
高嶺と對峙するが如く高峰と蛋も又金山
の勝槩を瞰せ高峰と蛋も又金山
に比べて国の狭くして和尚是れ也
招募まくまりに従て牧あり恵を施すと云ども主
人いつぬもなく紙うるものと云ふまくのことの股立
しまして去られ是れも一廣くして義の社の修国

あれハ平事面白なりとも招募ハ皆時原牧紙
う後と押しく云ふ今ハ主人も出ん
なく思ひ入て庵を葉永あて与つぬ保く謝して
自招募一つ免角しても年を好る家
得録を国ものの家にして音を保して中家を
出く右手の方一と坊うまくとうて但見巖石屏
立しく登ん坊も行ふ和尚一向に見上るまう
主僕とも思れ思て面あれハ和尚と計りて遊ても
らて呆れて登ハ指矢して我ハ入るの流
頂まで登りて彼方へ なりもふる勢ハ和
きれて右の墨うていうて行れを登り

ほつを怪石なる岩もいるとなんれと主僕五人ちさ
き如き多く蓊生ハ如うて先ハ立ち出ハ如の左ハ如
如きハ小巻燈如石級行う拾ひ集ハ一社ハ武蔵
を初る左ハ折ハ〻ハ東あと名れハ怪石絵錯〻或
盤石片〻重〻屏とあるハの或ハ蓊々鮮岩線
和〻〻滑ハ〻〻〻〻を矢〻易ハとなハ或と
石ハ橋ハ〻ハ孫のとハ〻ハ登る立ハ計〻〻眼境
喜〻嶮潤のとこハ多り〻ハ停立〻て四顧とるハ顫
上大ハ如うなる岩ハ〻〻〻ハ立とる砌ハ〻れハ先と
知る事も見〻〻ハ〻ハ岩ハ〻て〻ハ頃上近〻来る
ハハ〻ハ現ハ行ハも涙を吟ハ〻ハ〻ハ来るハハと

さ〻ハ如ハて岩ハ怪〻ハ左手の方ハ一山の老〻ハ
なるなるなる屏風の如く畳と重ハて一きハ
高ハハハ是中ハ岳なる〻〻ハの中ハ深分
肥大帽を戴ハ微笑ハる小ハハ大黒石と称ハの
名ハ名ハ顧ハハハ絶岸屏立書筆の真ハる
う如きハハ出ハ沒ハる〻ハ樹林の間ハ僅〻ハ
真頭角を〻ハ〻ハ一と名状ハ〻ハ雲霞
時ハ岩石の多ハ起り〻て高塩空ハ〻ハ〻ハ
ハと〻〻報ひ岩花の如ハ〻ハ長く高〻来帯の如
高武ハ散〻〻なるひハ合ハ散ハ〻ハ天地瞬息の
間ハ結明ハ〻ハ事ハハ〻ハ地為ハ白〻貝蓊動実

み草のあひだより一余躊躇する能はざるを見て
時のくて又巨角を踏んで登る事一大巨石のごと
巍々たる山うんに対するときの所なくして靡りあるをみく
ばかりにて云ふもなかるべき其間僅か八丈
にて石を累ねて能くいたるを去るこれ
能の法先の目を見れば四の一方のみ多くよせ他の一方
みなを抜て澎湃ふ能をせるがごとくこの巨岩
土人鬼の磨鑿岩と名づく喝破して謂ふ故なるべし
巨石の上僅かに畳一枚を布くべし四面快闊目も
瞳む対する勢平八惟来たるを搖るがごとくあれい
高きもはなはだしく遷ることもはなはだしく試みに岩上より小石

を投げ下さんとする間ふ桜木義々谷底見えさ
ずいの内の迷ふ所ちうんまうと見渡の能うべしと
投げ下さんとする静かの面に達するまで十セコンドばかり
時高きもつて推して知るべし新てかるを覚えず
我の豪胆と此をなして感ぜざる能はず
家にいて夏を暑く涼ぶせ玉ふとも其能を求
先の家を帰りしに此をお西家を進むべし余勢平子
ふ寺中を無の十ケ一も見給らきをいまく時刻を
神ばかり家号大人もを待ちひさをを在ををあ
ともに再び乗り能を時の稱うと能金して見を
呼ぶを海の日を必を悔ゆるあるべしとも

また年ごろまでの妙義の逆恨みの向ふへ鐵の向ふの
恋れいの為ちんと主僕四人国〳〵たる相
談を傍聞せし里の男の駆らよ山の奇を称し
さあう〳〵我を誘ひうの物語〳〵て止さるを真性
系といやまして寧ろ遠ざけて鐵れいとて再〳〵つき金傷を
切見発さて降んいさまて来り〳〵甲斐もなく呼
吉うかう〳〵ふと宝の幣手み向と告て〳〵くいまいは
庶ゆゑのあるこれ〳〵先ゆ申ふたれと〳〵相
井四人寄ゆて行〳〵ことぶも大人よも告けよサラスハ妙
義へ立帰て金の帰りを待わう〳〵芸みをるを要
あきるあり仏法るうと寄ナセハ幣宮ハ駆を
うき吉〳〵辞とあうう〳〵が猶ゆ為ん四日
九〳〵と世ひ人傷と怪をおとも先と是〳〵は
玉と駆りの寄て止まされハ押て止むつきさとも
行ゆさ〳〵ふとて其高と仕四人の主人なる
男の山ふ坊ちら〳〵云へハ山の谷をこのあとうよ
と事と託〳〵こやとくハ第りくもりんこヤツ賃銀
を貪るあるん小人を導くと駆を咲て吉ふ
と回ひハ賃銀ハ滅行ても与ふる不と恨ゆく事西
〳〵玉と云へハ主人ハやう〳〵ふ就わ常今日も家よ
ちた〳〵鞍を用ゆうてさるを西国ようつふべくもいから
それとうまて行あるうちをのうまハ是をりさんハわ

ろうろう僕もそと此里の人なる社とも此地に
住することを聞て八年を経ひ侍れば山の
いよく知る所多し二見ケ浦と社の右手に行
見るべきの松あり信仰らしく立て高さ三
四尺ばかりなる物なれども是なるべし
其辺を探しむるに岩と見て以前の石碑数段
を按じて此宮社なりの石宮社と
して一歩石のうち此地を踏ること丈余の洞窟
なり茅を伐れば其所なりと云伝へ名を
金洞岩といふ之を右手に傍ふて行くに榛莽篠蕩
して昼暗く路も法なるに此きとろ

僕岩の路に接り僕然お對するに一大して
一八ばかり長壮実に伊勢の二見ケ浦として図画に
画るるよりも小なるに奇石の二つ北方に倚立
して其形さこそ埔に似たりと云ふ奇なりとい
へ巨大なるを人力をもて屈ひくるまを
いふべきなり実に是山の法巌石ともに奇絶な
る造化偏して草木乾機神秘を此地に行せし
るるといふべきなり往年東京より
雅人狂歌師此巌を見て文材を人と
せしのみならず奇絶と大巌石のを多うれば
恍然として一句を賞賛の詩を賦すと

こゝ宮ゝまでゆきつゝ見果て〻本道に出て石に
折れて第一石門を過ぐれば折も夏の末なれば草
葉の露ゝ呼ぶ虫の音も定めなきわけなく草葉の道
くまなく〻しくあるを踏分 峰高くして草生ふ山刀抜き
放ち上り切りて抜て先陣を主従唯一人の武士
守りてゆくこと無数蓬蒿顧る暇なく行き恰も
軍騎を堅陣に臨むる勢あり 漸くして第二門
至る此門第一に重なりて其大さも小〻なれど其宮の
六角くして下狭く脇間に歩きるの思ひ居れば
動ぬ毎のみ若ひの鳥群り好音とお和して道に
間の路甚多狭窄なるを 高く立ひ〻昏きう上

に潤潤なれば頻に足を失ひ倒るゝ掉ふ
もなくして笑えるうして鳥道を蛇盤して第三
門に至る此門に第一二門に比して第三門
こゝ甲板にも拵へ廣く宮殿閣なり第四門も
三門と似寄り各門と距離四五丁に過ぎるれども
曲折を辿回るを以て道も甚だ遠うして四門を
過て漸く登る眺望殊勝のみならずこゝに人
とも石の腰うちうみて結ひ〻結ひ〻結
御座こゝにて一二の門扉屋の如く對立し其面に
弘剣と前宮めきものハ大柱岩と云ひ此然と〻
亀の背を眺めて似るものを名て亀石と云其

他花攫しかきとる埒郭のめぐらせる傾夢を浮き立
ほり持ふしつつ遠く記臆をつくもいろにそれなる又数
丁を登る程を樹木の名花ならぬ一年もなりぬ道導
者曰是を見る所花細と唱へ大抵人のあるぶるるのの
初夏の比い岩躑躅さき備て一面紅を深くつらなり
花候の勝地なり又深根郡籔間嶽の侵入を見れば
数撃を聞くとふ行の飲るるを高しは数百尋
を登り行くを大鷲石を攫て道窮り為
此迄数極のみ狭窓瞰下せば深き幾千仞の下
にうるめる樹木蓊蔚として其情を平視るの
寂として鳥の音のみの聴へ物を言うに見れば

恒岩奇石蘄然として星を抜て攀ちつつ上る絶
もの一余を行きれたる試みに導きつつあるを
導者徴笑しかれの為に苟も男術を以て生る
能うるきるいなきを厳多かうる潜うる大
石を攀る術を多知るるる年償多年也
東に在合なれば男術を知ら試先
攀ち中入べしと今が新く拙を見熟く寄せ
なといと丁寧に教ゆるも多年の経歴よりて
初メテ然に得るるの一朝にして学ひ知くるにの
言を瞠目神懐れて星進を導を安之意を
僕は為に雇しく幸して知るるを 均絶壁を登り

ぬれハ石の路にて踏ハ足を傷ましの胎内窟と云ふ所ハ高さ拾五尺を切る窟を岩橋を架したるが如くして其傍僅に空を行く人國の如く撫を畏れ三度行る思ひをハ数百仞の下嶄然として峙り切なるが如く魂も消るの心地ハ慄然として流れ過ぐるを待て人命の巨岩あり中腹谷間にて僅に身を寄るを得る角間して道を胸背を攀て又出る巨岩角無れ下りうれハ太平よりの出る道を人〻胎内窟と名るも理なり元のところに出て右手の大岩石の移を拔藤蔓を以れハ呼空と

はるかに出るを石の行る其西手間して摩耶五畳を登るもいとなんを怪も竜の今中を通るとなる恐ものを見ると竜石のして蓋し山頂の極まる也と云ふ事を聞て気色快を覚え一鞭を加へ仙窟と称ると云ふ此山嶽を試て撃を書を拔琴此山嶽の響を聞て石金の〻象余の窟を拔手喝象なるが如く気色目を自ら落ち西土テモスセンスと云て大海の西土の対〻窟の外法を学ぶ窟を縁智の山祖と云る事と老僧の気ハ変を以て変を曰ハれる〻〻出られて塵襟〻瀑然〻を見の墨

斗を出て長句一片を岩面に書して天[illegible]
人を驚かしめんとなり[illegible]れば[illegible]年[illegible]
の趣[illegible]を[illegible]の[illegible]を[illegible]して人を[illegible]
[illegible]と余の浩瀚を[illegible]れば[illegible]を[illegible]
[illegible]門の事[illegible]此[illegible]の時[illegible]義の[illegible]
一句[illegible]井田の逗[illegible]の日を西山に[illegible]

游房日載

士君子志ヲ失フテ山巔水涯ノ間ニ彷徨ス猶ホ樂ム所アリ況ヤ男兒天下多事ノ際ニ生レテ我主義ノ為ニ山河ヲ跋渉シ所在有志者ノ厚待ヲ享クルニ於テヤ其壯快寧ロ言フニ勝ユ可ケンヤ曩キニ我同窓山田奠南天野淞村罟山梧堂暑ヲ亨州山間ニ避ケ彥ノ有志者ト時事ヲ談論セシフアリ談地有志者ノ政治ニ熱心ナル爾來益々我堂ト氣脈ヲ通セシフヲ懇望シ終ニ今回ノ游アルニ至レリ十一月中幹偶々事アリ談地ノ安田勲氏出京シ余輩ノ来游ヲ促ス終ニ十一月九

日ヲ以テ招聘委員荒砥通太郎小野梓砂川雄俊ノ三氏ト共ニ彦州丸ニ搭シテ東京灣ヲ發ス此日一天清朗波濤高ク擧ラス海上恰モ砥ノ如ク火船射ルカ如ク瞬時東京ヲ失ス荒砥氏曰ク彦海ニ航スルニ二艘ノ滊船アリ一ハ彦州丸ト云ヒ一ハ通快丸ト云フ其船主ヲ異ニスル為メニ頃來相競爭シテ止マス其速カヲ較フレハ通快丸或ヒハ彦州丸ニ優ルアルカ如シ而シテ其速ナルヲ取ラスメ其緩ナルニ就キタルモノハ彦州丸ハ彦州所屬ノ船舶ナルヲ以テナリ余不敏ナリト雖ヒ愛國ノ情ニ切ナリ鄉國ノ船ヲ棄テ、他ニ就クニ忍ヒス諸君幸ニ船ノ緩漫ナルヲ咎ムル勿レ余曰ク未タ彦州ニ達セス先ツ其一班ヲ知ルヲ得タリト四人團欒話ニ入ル小野氏往時ヲ談シテ曰余嘗テ明治維新ニ際シ軍ニ北越ニ從ヘルアリ當時血氣將ニ盛ンニシテ却テ赤城ヲ脫セルヲ遺恨トセリ今ニ迨ンテ之ヲ回想スレハ実ニ心悸ルヽトコロアリ若シ當時ニ在テ死セハ豈ニ今日ノ行アランヤト余曰ク然リ然カレトモ當時ノ小野君ハ今日ノ小野君ニ非ス若シ當時ノ小野君ニシテ死スルアルモ余ハ深ク之ヲ憾トナサヽルナリト一笑ス談話刻ヲ移シ船師浦賀ニ達スルヲ報ス余輩相携テ甲板ニ登リ馳眺スルニ赤壁屹立巖然城郭ノ如ク両壁ノ

間舟檣林立一良港ヲ為ス余小野砂川二氏ヲ顧ミテ
曰ク此地嘗テベルリイカ上陸セル舊蹟ナリ尋常ノ
行且ツ追懐ノ情止ム能ハス況房州有志者ノ招聘ニ
應シ改進ノ主義ヲ懐テ此地ヲ經過ス豈ニ感慨ニ堪
エ可ケンヤ若シ當日ペルリイノ来航アラサリセハ
改進ノ主義ヲ今日ニ唱フルヿヲ得サルモ知ル可ラ
ス又火船ノ我ヲ載セテ此茫洋タル海ヲ渡リテ半日
ニシテ房地ニ至ルヿ能ハサルモ知ル可ラスト二氏
共ニ首肯茫然馳耽スルモノ須臾船寄港スルヿ暫時
ニメ發ス之レヨリ房州ニ至ル海上三里強房地指點
ノ間ニアリ之ヨリ波濤サシク高ク船体動揺止マス
永ク塵境ニアリテ此ノ壯觀ヲ得爽快云フ可カラス
午後二時房州平郡勝山ニ達スレハ同地有志者迎ヒテ
海岸ニアリ相携テ一旅舍沼田屋ニ就テ憩フ少頃高
梨助兵衛氏至ル高梨氏ハ千葉ノ縣會議員ニシテ老
練着実學アリ望アリ實ニ天寧寺演説會ノ會主ナリ
小野君話次千葉縣令ノ施治ヲ問フ高梨氏曰ク船越
氏ハ通人ナリ故ヲ以テ施治又タ通ナリト小野君船
越氏知ル高梨氏ノ觀ルトコロ當レルヲ称ス高梨氏
先ツ去リ會場ノ整理ヲ為ス余小野砂川荒砥ノ諸氏ト
午餐ヲ喫シ歩シテ佐久間川ニ沿ヒ下佐久間村天寧
寺ニ到ル下佐久間村ハ勝山ヲ距ル凡ソ十六

七丁山丘ニ沼フテ村落ヲ為ス寺ニ到レハ安田勲氏
先ツ在リ高梨氏ト共ニ迎ヘテ余輩ヲ本堂ノ一室ニ延
キ茶菓ヲ饗ス須臾ニシテ聽衆會場ニ来集ス安田氏
先ツ一題ヲ演シ小野砂川二氏及ヒ余モ亦タ各々一
題ヲ演ス聽衆演説ヲ聽クニ慣レ柏手喝采能ク其節
ニ中ル此日會スル者無慮二百人皆ナ熱心シテ余輩
ノ演説ヲ聽クモノヽ如シ會罷リ懇親會ヲ開ク高
梨安田岡田貞壽(勝山村戸長)福原七兵衛(下佐久間村
戸長)澤寛藏(二部村戸長)荒砥通太郎(改進社長)
岩崎善右衛門(浦田村戸長)ノ諸氏ヲ始メ凡リ三十
余人ナリ曾根木村等諸氏交々立テ席上ノ演説ヲ
為ス余等又タ立テ謝詞ヲナス既ニシテ談笑湧クカ如
ク杯酒献酬愈々盛ンナリ之ヲ聞ク余輩ノ未タ来遊
セサルニ先チテハ當地老成壮年互ニ相納レス老成
ノ人ハ壮年ノ輩ヲ子ケテ事ニ熟セサルヲ咎メ壮年
ノ輩ハ老成ノ人ヲ遠ケテ事ノ迂ナルヲ責メ共ニ疏
ンスルノ風ナリ長幼相會シ一席ニ見ルヿ殆ントナ
カリシニ余輩ノ行ヲ以テ初メテ相解クニ至リタリ
ト十時會場ヲ辭シ歩シテ勝山ノ旅舍ニ帰ル皎皎月
正ニ明カニ秋容萬項意氣ヲシテ暢快ナラシム勝
山ハ西房ノ一大漁村ニシテ凡ソ六百戸アリ錯山後
ヲ蔽ヒ洋海前ニ當リ風致愛スヘシ此地多ク水仙ヲ

産シ又軟質石材ヲ出シ田町石ト云フ
廿一日曉起荒砥氏鯨肉ヲ饗ス氏嘗テ鯨肉ヲ罐詰
ニシ之ヲ輸出セントスルノ意アリ即チ試ミニ之ヲ
製セシモノナリ其味生鮮ノモノニ劣ラス嘉賞古
ヲ鼓ス朝餐ノ後阿淡郡布良村富井武平氏南房ノ
有志者三津井氏等来話ス富井氏ハ布良ノ漁家ナ
リト頗ル時事ニ通曉シ共ニ語ルニ足ル三津井氏明
年余輩ノ早游ヲ乞ハン為メ来レルナリ昨夜安田氏
ト天寧寺ニ別ルヽヤ明朝馬ヲ遣ハシ余等ヲ迎フノ約
アリ而シテ馬未タ至ラス余等徒ラニ待ツノ迂ナル
ヲ思フヤ歩シテ途ニ上リ勝山ヲ發ス行クコト僅ニ
十餘町ニシテ馬丁三人乗馬ヲ率ヰテ来ルアリ余等
ヲ見テ揖シテ曰ク公等ハ東京ノ諸公ニアラスヤ鄙
人ハ安田ノ僕ナリ来リテ公等ヲ迎フ請フ此馬ニ乗
セヨト余等三人各々之ニ跨リ下中丑佐久間村ヲ経
過シ奥山新道ヲ通乗シテ奥山村ニ至ル北地高梁
氏ノ居村ナリ一丘高キ處ニ柴門アリ扁シテ自由巣
ト云フ即チ改進社ノ位置ナリ改進社ハ村中壮年諸
氏カ農暇學ヲ講スル處ニシテ荒砥氏之カ長タリ木
村正次郎出口吉太郎二氏之レカ幹事タリ以下六七
十名ノ社員アリ夜ヲトシテ毎夜相會シ五六里以外
ヨリ来集スルモノアリト鋭意実ニ驚歎スルニ足ル

社員数人余等ヲ延テ社内ニ入リ茶菓ヲ供シ時事ヲ談論ス社員ノ政事ニ熱心ナル共ニ語ルニ足ルモノアリ蓋シ本社講學ヲ名トスト雖ドモ其実ハ政談社ナリ語次荒砥曰ク曩キニ船越縣令カ此地ニ巡視セル時當地ノ門閥家某ハ先ツ箒ヲ取テ門前ヲ掃除セリ蓋シ其意自由ヲ掃除スルニ有ラン余笑曰ク諸君ハ縣令經過ノ後再ヒ門外ヲ掃除セシ乎自由巣官吏ノ躁躙ニ付シ黙ス可ラスト一座喝采一笑ス座中詩歌ヲ示シテ志ヲ表スルモノアリ余主權論ヲ出シテ贈ル休息頃刻前夜勝山懇信會ニ列セル諸氏踵テ至ル再ヒ馬ニ上リ途ニ就ク諸氏歩シテ余等ニ伴フ勝山ヨリ平塚ニ到ルノ道険隘馳驅ニ便ナラス況ンヤ山川ノ風景頗ル都人ノ意ヲ悦ハスモノアリ故ニ緩々馬ヲ進マセ敢テ驅馳セス有志諸氏ト且ツ話シ且ツ進ム往ク一里計山漸ク険峻ニシテ馬上上ル可ラス乃チ馬ヲ捨テ歩シテ之ニ上ル嶺ニ上ル平長狭両郡ノ境標アリ眼界廣濶凡光奇絶三人賞歎止マス下リテ有志者ノ来迎ニ逢フ余等共ニ其勞ヲ謝シ歩シテ隧道ニ至隧道ハ凡ソ四十二間嵓石ヲ穿テ之ヲ通ス実ニ奥山平塚二村人ノ義挙ニ成ル聞ク高梨勘兵工氏等実ニ其事ヲ董シ之ヲ落スト隧道ヲ出テ又馬ニ上ル往クコト数歩一老父ニ遇フ小野君ニ数年仕ヘル義

僕高梨次郎兵衛ナリ相伴フテ終ニ平塚村ニ入リ常福院ニ到テ馬ヲ下ル院ハ演説ノ會場ニシテ聽衆無慮四百人殆ント平塚全村ヲ挙テ来リ會ス警官又既ニ在リ余等ノ来ルヲ待ツモノヽ如シ安田永井讃藏佐久間吉太郎等ノ諸氏相迎ヘテ余等ヲ本堂ノ一室ニ延キ午餐ス永井氏ハ元ト葉ヲ慶應義塾ニ脩メタル人ナリ成業ノ後千葉中學ノ教員タリシカ頃日時事ニ見ル所アリ断然其職ヲ辞シ力ヲ茲ニ致ス蓋シ又房ノ志士ナリ余胸懐ヲ刮テ之ニ語リ刎頸以テ之ニ許ス休憩少頃ニシテ開會ス安田氏先ツ一題ヲ演シ永井氏余及ヒ小野君亦タ一題ヲ演ス踵テ砂川君ノ演説ニ

及ンテ言フ所治安ニ妨害アルヲ鳴ラシ警官之ヲ中止シ全會ヲ解散ス始メ小野君及ヒ余二題ヲ演スル約アリ而シテ今全會ノ解散ニ逢フ遺憾知ルヘキナリ當日木更津警察署ヨリ特ニ派遣セラレタル警官アリ合セテ八名三名ノ筆記者ヲ置テ余等ノ演説ヲ筆記セシム蓋シ戒嚴スルトコロアルナリ演説後有志者踵テ懇親會ヲ此院ニ開カントス警官之ヲ許サス壮年ノ有志者激動其故ヲ問ハントス余等之ヲ止テ罷ム院後ノ一茅舍ニ就テ懇親會ヲ開ク會スル者高梨勘兵衛永井傳十郎(千葉縣會議員)永井讃藏佐久間吉太郎(戸長)澤寛蔵(戸長)小泉嘉市山喜一ノ諸

ノ諸氏無慮六十餘人ナリ宴席廣カラス且ツ清カラス衆人膝相摩スルニ至ル幹旋趨馳會主自カラ之レニ當テ婢僕ヲ須ヒス又タ饗スルニ土産ヲ以テシ酒ハ濁澪肴ハ山實野菓盛ルニ平塚土産ノ竹筥ヲ以テス余其ノ質素天真ニ感シ轉タ興ニ入リ思ハス數蕉ヲ傾ク會主衆ニ代ハリ起テ曰ク君等遠ク東京ヨリ來ル其勞実ニ謝スルトコロヲ知ラス然レトモ美酒嘉肴ハ君等ノ飽ク所ナラン故ニ此ノ村釀ト野菓トヲ供ス君等幸ニ我儕ノ熱心ヲ採テ其無禮ヲ恕セヨト余等交々起テ席上ノ演説ヲ為ス會散シ余等安田氏ニ伴フテ其家ニ至ル氏其別室ヲ清クシテ余等ヲ延キ待遇甚タ厚シ高梨永井荒砥佐久間氏等來リ訪フ安田氏ノ舍弟直氏又坪ニ在リ晩餐ヲ共ニス酒清醇肴新鮮器清麗談笑數刻ヲ移ス余安田氏ニ伴フテ別室ニ至レハ永井議藏氏等二十餘人アリ酒已ニ酣ナリ余又タ席ニ列シ献酬交々勉メ殆ント寢ニ就クヲ知ラス蓋シ席ヲ異ニセメ余輩ヲメ敢テ他ノ有志者アルヲ知ラシメサルハ余輩ノ盡日談論ノ疲労ヲ思フテナリ主人ノ注意謝スルニ足ル

二十二日快晴朝餐後有志諸士陸續來リ訪フ安田氏累世寶物トスル大塔宮親寫ノ摩訶般若波羅蜜多心經及ヒ日蓮上人手寫法華經數卷ヲ出シ示ス親王ノ

筆法遒美嚴正古意掬スヘシ上人ノ経細字ヲ以テ寫
シ書法密正絶テ誤寫ナシ辛苦思フヘシ経小軸ト為
ス元ト八軸アリ中古二軸ヲ失フト惜ムヘシ共ニ之
レ得カタキノ珍寶ナリ安田氏世々高倉神社ノ祭ヲ
司ル神社ハ足利氏ノ創造ニ係リ実ニ日本武尊命
ヲ祭ルト云項刻ニシテ馬丁乗馬ヲ牽テ来ル乃チ高
梨氏等ト分手シ發ス余安田氏ト馬ニ上ラス緩歩シ
テ發ス蓋シ行々談論序地ノ事情ヲ悉サント欲スレ
ハナリ余先ツ問テ曰ク序地ノ人情如何余ヲ以テ之
ヲ見レハ質朴純粹ナルカ如シ安田氏曰ク実ニ然リ
故ヲ以テ或ハ長者ニ接シテ禮讓ヲ欠クノ失点ナシ

セス又事ニ當テ鋭意熱心ナル寧ロ剛愎ニ近シト余
又問テ曰ク序地夫レ余輩ノ此行ヲ以テ収メ得ヘキ
乎安田氏曰ク既ニ収メ得タリ余曰ク竊カニ其傾ナ
シトセス余輩ノ此行結黨ヲ行フヿヲ得ルモ尚ホ之
レヲ猶豫スルニ如カス聞クトコロニ據レハ各郡未
タ和熟セスト余ハ黨派ノ為メニ謀ルニ小部ヲ挙ケ
テ之ニ應スルヲ欲セス各郡相和シ一体ヲナシテ一
挙之レニ應センヿヲ冀望スト安田氏又タ余カ言ヲ
然リトス午時北風原永井氏ノ家ニ到レハ小野砂川
二君既ニ在リ余等ノ到ルヲ待ツ永井氏ハ安田氏ノ
外戚ナリ永井氏盛膳ヲ設ケテ余等ヲ饗ス談笑数

剌ヲ移ス傅十郎氏ハ温藉閑雅ノ人ニシテ家富ミ學
ヲ好ム実ニ長狭郡ノ豪族タリ午後一時永井氏ヲ去
ル余等讃蔵氏ト馬ヲ驅テ馳ス花輪村等ヲ過キ遂ニ
前原ノ近村横渚村ニ至ル横渚村ハ會場観音寺ノ在
ル所ナリ會主安田松亭久保七左エ門等ノ諸氏先ツ
在ルヿ既ニ場ニ満チ余輩ノ到ル遅キヲ怨ムル者ノ
如シ余偶々馬ヲ下ルノ際誤テ脾ヲ傷フ場已ニ開キ
苦痛甚タシ小野君大ニ之ヲ憂フ余戯レニ曰ク天下
泰平ノ時ニ生レ久シク馬ニ上ラス脾肉ヲ生セル為
メニ之レヲ傷フ請フ君之ヲ意ニ介スル勿レト永井
讃蔵氏一題ヲ演シ安田勲氏尋テ演場ニ臨ミ辨説未
タ央ニ至ラス言偶々集會條例ノ事ニ及フアリ警
官一喝中止解散ノ聲ヲ發ス漸ク佳境ニ入ント欲
スルノ演説ヲ止メ之ヲ演フルヿナカラシメタリ聽
衆四百憤然其故ヲ問ハント欲ス皆曰ク余等ノ遠ク
此地ニ来リ一宿或ハ二泊ヲ累子テ此場ニ臨ミタル
ハ只タニ東京諸士ノ演説ヲ聞カンカ為メナリ然ル
ニ未タ其一ヲ聞クヲ得スシテ解散ニ遭フ豈ニ默シテ
止ム可ケンヤト會主聽衆ヲ慰ムルトコロヲ知ラス
余輩又タ聽衆ノ意ヲ酌量シテ堅ロニ感慨ニ堪ス嘗
テ之ヲ聞ク千葉縣ノ警察ニ嚴ナル頃来甚シキモア
リト故ヲ以テ本日ノ演説ノ如キ共ニ戒心スルトコ

ロアリシナリ而シテ遂ニ再タヒ停止解散ノ厄ニ逢フ
蓋シ猥ニ言論ノ自由ヲ擯棄スルモノト云サルヲ得
ンヤ散會後天津ノ有志者田畑氏安田氏ヲ伴シ来リ
余等ノ演説ヲ請テ天津ニ学術ノ演説會ヲ起サン欲
ス余等ノ初メ東京ヲ發スルヤ本日ヲ以テ前原ヲ發
シ明日ヲ以テ京ニ皈ラントヲ期ス然ルニ余等既ニ數
々演説中止解散ノ不幸ニ遇ヒ大ニ意ヲ失ス又タ自
ラ慰ムル所ナクンハアラス思ヘラク學術ノ演説ハ
本意ニアラスト雖モ為スコトナキニ勝ラントト遂ニ
其請ヒニ應シ明日赴カントヲ約ス
九三日朝餐有志者交々来リ接ス是レヨリ先キ安
田永井諸氏ト浪太蓬島ニ赴クノ約アリ應接ノ間舟
艤ヒ成ル乃チ共々駕シテ赴ク蓬島前原ヲ距ル一
里世傳ノ源右府ノ石橋山ニ敗ル、ヤ遁レテ此島ニ
匿ルト島ニ一舊家アリ平野某ト称ス源右府ノ時ヨ
リ傳ヘテ今ニ到リ世々此島ニ居ル家ニ頼朝ノ古枕
ナル者ヲ蔵ス伽羅ヲ以テ之ヲ作リ両端ニ漆シ畫ク
ニ麒麟ト蔦葉トヲ以テス其工精緻未タ頼朝ノ古枕
ナルヤ否ヤヲ知ラスト雖モ蓋シ數百年ヲ経ルノ器
タルヲ信ス主人海鮮ヲ調シテ余等ヲ饗ス餐後歩シ
テ水涯ヲ遶ル太平洋ヲ望ム右ハ朝夷郡ノ諸山左ハ
上総長狹郡ノ諸岳相對峙シテ宛モ畫図ノ如ク奇嵒

怪石虎ノ如ク立チ龍ノ如ク蹲リ怒濤之ニ觸レ白雪
湧クカ如ク真ニ是レ絶世ノ奇觀ナリ既ニシテ平野
氏ニ還リ其待遇ノ厚キヲ謝シ　前原ニ還ル時ニ
午後二時ナリ余等今宵天津ノ演説會ニ臨ムノ約ア
リ而安田永井氏等ト結束シテ途ニ上ル天津前原ヲ
距ルヿ三里海ニ沿フテ行ク至レハ會主四宮喜三郎
氏余等ヲ迎ヒ會場ニ延ク聽衆既ニ會場ニ滿ツ余等
ノ来ルヲ待ツ者ノ如シ安田勲永井両氏各々先ツ一
題ヲ演ス余等モ亦タ代々々演壇ニ上ル既ニシテ
演説會ヲ閉チ某ノ亭ニ抵リテ懇親會ヲ開ク會
スル者七十餘人皆ナ余等ノ政談ヲ聽ク能ハサルヲ

憾ム席上余等ニ一場ノ政談ヲ促ス既ニシテ警官追
躡シ来リ別室ニ在リ余等其需メニ應スル能ハス余
立テ衆ニ告曰ク多衆ニ向テ政談ノ演説ヲ為ス官其
制規アリ余等之レヲ犯スヿヲ欲セス然レトモ政事ヲ
談スル必ラスシモ演説ヲ藉ルヲ用ユス酒杯ノ間諸
君ノ質義ニ對フルアラハ庶幾ハ其不自由ヲ補フニ
足ラント余等中央ノ席ニ就キ會衆諮問ノ衝ニ當ル
衆大ニ喜ンテ各々疑フ所ヲ述テ余等ニ質ス應答湧
カ如シ頗ル衆ノ滿足ヲ得タル者ノ如シ然レトモ既ニ
警官ノ隣席ニ臨監スルアリ衆又心不平ナキニアラ
ス散會後更ニ一會ヲ張ラントヲ欲ス余等再四之ヲ

辞セトモ聴カス余等カ旅館ニ再ヒ開宴ス會スル者
三十餘名警官追躡又来リ監ス宴酣ニシテ放歌吟
詩謳謔舞蹈盛ンニ起ル暗ニ不平ヲ訴フル者ノ如シ
夜深シテ散會ス
廿四日今朝余等将サニ皈京ノ途ニ上ラントス偶々
載白ノ老翁節ヲ上人塚ヨリ曳キ安田氏ヲ介シテ余
等ニ見ヘンヿヲ請フ者アリ其来意ヲ叩ケハ曰ク僻
境嘗テ演説會ヲ聞カス諸大家ノ来遊ヲ機會トシ高
論ヲ聴カンヿヲ欲スト其冀望太タ切ナリ四宮氏亦
少来リ接シ一日ノ淹留ヲ得テ泛舟鯛ノ浦ニ遊ハン
ヿヲ勸ム小野君東京ニ約日アリ敢テ諾セス余曰ク
老翁ノ遠ク節ヲ曳テ余等カ所見ヲ聴カンヿヲ求ム
政治ノ氣運トス可シ余等ノ再遊亦タ期シ難シ請其
需メニ應セン況ンヤ四宮氏ノ厚意亦タ空フス可ラ
サルヲヤ小野君遂ニ諾ス由テタ陽上人塚ニ至ラン
ヿヲ約シ亦タ四宮氏ニ舟遊ヲ諾ス老人欣然謝シテ
去ル既ニシテ舟艤成ル両安田氏永井四宮氏他数名
ノ有志者ヲ伴フテ駕ス鯛ノ浦小溪ニ至ルノ海ヲ称
ス蓋シ小溪ハ日蓮ノ舊蹟ニシテ信者遠近ヨリ輻輳
ス而シテ北海ノ魚ハ日蓮ト云々ノ故アルヲ傳フヲ
以テ漁師又タ網ヲ下サス以テ鯛魚群集ス是レ北浦
ノ名アル所以ナリ舟中行厨ヲ開テ對酌ス望海ノ風

光杯ニ入リ漁夫又タ海ニ投シテ鰒魚ヲ獲酒ヲ助ク爽快云フ可カラス漸ヤクニシテ舟天津ヲ距ル遠シ舵夫曰ク北邊魚最モ多シト頻リニ舷ヲ叩ク余等又タ相和ス既ニシテ波頃数畝動揺ス諦観スレハ一簇ノ紅魚ヒレヲ動シテ来ルナリ漁夫小魚ヲ舟外ニ投ス魚皆ナ争フテ至ル紅鱗日光ニ映シテ光彩目ヲ奪フ余等覚ヘス快ト称ス行クヿ里許小湊ニ達ス一大刹アリ日蓮ノ旧蹟ナリ舟ヲ捨テヽ一覧ス壮大見ルヘシ余等於是砂川兄ト別ル蓋シ兄船ヲ好マス余等ト濠船房海ヲ渡ル能ハス陸路千葉ヲ経テ東京ニ皈ラントスルナリ余等又タ船ニ駕シ午後一時天津ニ皈ル蓋シ此行遊房中ノ快事ナリ哺後安田永井二氏ト共々天津ヲ発ス天津ヨリ上人塚ニ至ル　里六時漸ク達ス先キノ老翁ノ家ニ至ル老翁ハ久保某三菱會社員久保扶桑ノ父當地負望ノ人ナリ且ラクアリテ余等ヲ懇親會場ニ延ク會スル者三十名余等各々一場ノ演説ヲ試ム衆亦タ政談ヲ聴カンヿヲ請フ余等官制規アルヲ曰フテ諾セス既ニシテ数名ノ壮士アリ進ムテ曰ク余等請フ家外ニ衛リテ警官ニ備ヘン冀クハ余等ノ請ヲ容レヨト余等國法ノ背ク可カラサルヲ曰テ止ム然レトモ衆ノ冀望亦タ空フスルニ忍ヒス更ニ又タ一場ノ学術演説ヲ為スヿリテ衆尚

志満足ヲ得サル者ノ如シ安田永井二氏ニ求メテ再
三演説ヲ請フ二氏疲労シテ演説ニ堪ヘス余乃チ立
テ自問自答剋刻ニ及ブ衆初メテ満足スル者ノ如シ
余等今夜十二時ヲ期シテ此地ヲ発シ拂曉ヨリ渠船
飯京セントス衆ト別ル乗馬通宵天明ニ至リ渠船ニ
投シテ京ニ帰ル實ニ十六年十一月廿六日也

澡泉紀行

人常ニ余ヲ目シテ烟霞ノ癖アリト為ス余之ヲ辞スル能
サルナリ苟リモ身ニ悩アレバ此癖忽チ発スル而メ之ヲ制セ
ントスレバ往々ニシテ疾ヲ生ス余之ヲ憂フ故ニ悩アレバ
必ス鞋策山水ヲ探討セサルアラサル也今茲明治廿四年
十二月偶々一旬ノ閑ヲ得番町ノ僑居ニ在リ学友坪内雄
汀兄偶々阿兄ノ病ヲ助ケテ熱海ニ至ラントス別ヲ余ニ告ク
余送テ九段坂ニ至リ旗亭ニ入リテ一酌其行ヲ送ル酒酣ニ
シテ坪兄余ニ謂テ曰リ此数日ノ学暇ハ刻千金ヨリ重シ而シ
テ君ト此良辰ヲ共ニスル能ハス余獨リ空シク家兄ノ病ニ伴
ナフ豈ニ吾カ意ナランヤ兄烟霞ノ癖アリ葉リハ無ニ趨ハン

余即チ欣然之ヲ諾ス坪兄明日ヲ以テ京地ヲ発シ全明後日ヲ以テ程ヶ谷ニ上ラントヲ約スシテ別ル実ニ十二月九日ノ事ニ属ス

九七日　黎明人車番所ノ傍居ヲ発ス新橋ヨリ汽車ニ駕シ神奈川ヘ達ス更ニ馬車ヲ得テ小田原ニ抵ル余性歩行ヲ愛シテ車馬ヲ好マス然レ共此間ノ道路ヲ経過スルヲ已ニ数回又是ヲ労スルヲ欲セサルナリ二時藤沢驛ニ哺シ大磯ヲ過リ北日而氣初テ開キ日光磨盪麗班山色天ヲ撐ス峯頭雪ヲ積ミ白雲曖ヒ横ハリ眺望殊ニ佳絶

芙蓉突兀五千仞海内高唱倒扇名雪嶺寒光如削玉白雲一片隆東瀛

薄暮小田原駅ニ達シ中松楼ニ投ス楼壮大酒醇ニシテ魚鮮ナリ覚ヘス数航ヲ傾ケ羈情ヲ慰ム連甍ノ紅楼東鼓鼓繁絃ヲ奏シ暗ニ余カ酒興ヲ助クルモノヽ如シ

九八日　楼婢ノ呼声ニ暁夢ヲ破リ起キ来レハ東窓未タ白カラス朝餐ヲ促シテ前路ヲ問フ楼主曰ク之ヨリ道路極メテ峻嶮車ヲ遣ラス馬又用ユヘカラスト乃チ役夫ヲ得テ行李ヲ負ハシム偏々隣房客アリ同シク熟海ニ赴クニ過フ相携テ発ス駅ノ東南ヲ曲折シテ早川村ヲ得タリ一流アリ早川ト云蓋シ函根芦湯ノ末流ナリ石橋村ヲ過ツ村ハ石橋山ノ麓ニ在リ源頼朝兵ヲ挙クルノ地ナリ四賢今尚ホ存ス海ニ沿フテ山脚一條ノ窄路ヲ通シ路傍岳石ノ牆壁アリ苔蘚蒼々

トレテ拗スヘシ同行ノ客曰リコレ保元ノ乱ニ築キタルナラン
予余曰リ然ラス若シ敵ヲ防禦スルナリセバ何ゾ海ニ沿フテ之ヲ築リヲ要セシヤ思フニ後世道ヲ拓クニ当リ岩石ノ去ルヘキ處ナキヲ以テ之レヲ推積セルニ過キサルヘシト顧ミテ之ヲ役夫ニ問フ曰リ此辺多リ野猪ヲ出シ倏々田野ヲ蹂躙シテ害ヲ為ス之ヲ以テ防遮スルナリト時ニ風蕭々松林ヲ鳴シ怒濤ト相和ス躊躇慷慨歩ヲ進マス

依山臨海自坭城　石橋山下廿人行　怒濤声断松声
續憶起去年叱咤声

米嘯村ヨリ阪路峣崅石足ヲ嚙ム根府川ニ抵ル此地往時函嶺ニ出ルノ間道ナリ故ニ幕政ノ時此ニ関ヲ設リト云フ

江ノ浦ヲ経テ吉濱ニ至ル旗亭ニ入リ酔ヲ買フ亭海ニ面シ真鶴岬ヲ東南ニ望ミ豆ノ七島水雲ノ際ニ隠見ス奇観云フヘカラス蓋シ小田原ヨリ熱海ニ至ル沿道中ノ勝地タリ此辺多リ小松石ヲ産ス皆吉濱ヨリ艤シテ他ニ輸スト云余酔テ歩蹣跚タリ則チ同行ノ客ト肩輿ヲ僦ヒ梦ヲ載セテ去ル熱海ノ坂口屋ニ達スレバ已ニ四時ナリ渡辺安積兄宿シテ坂口屋ノ後楼ニ在リ相偕テ穂積八束兄ヲ露木楼ニ訪ヒ梓内兄ヲ富士屋ニ訪フ楼主未タ兄ノ着セサルヲ報ス熱海誌一冊ヲ購フテ帰ル誌大内青巒氏ノ編スル所熱海ノ勝ヲ網羅シテ一小冊子ニ納ム蓋シ当地ノ景状ヲ知ラント欲スレバ之ニ過クルノ良書ナキヲ信ス夕陽砲礟ノ如キ声ヲ聞リ驚テ戸ヲ推セハ濛霧四

鉄ニ怒尺錚スル能ハス烟ノ如ク雨ノ如ク翻ツテ戸ニ入リ衣服為メ
ニ湿フ之レヲ楼主ニ問フ曰リ之レ噴泉ノ時至ルナリト即ケ其起
ルトコルヲ尋子テ行リニ濛霧ノ中圖ラス坪内兄ト邂逅ス相喜
テ曰ク何ゾ兄ノ来ルノ如斯晩キヤト携テ余カ寓ニ来ル兄懐
裡ヲ探リテ一首ノ狂歌ヲ示ス

あふみ乗りて石橋山を越れるゝ路いと険岨
なりおもやハ苦しさをヨイケヨこゝこゝと拙話
そしくて越ゆれハ真田ノ義忠ヲ忠死のあるへん
ど思出て

いつも見を思ふあるらんあふミのまゝも生ニこと
拙者ちとまる

杯盤ヲ興シテ對酌ス坪兄得意説起シテ曰リ路次一條ノ佳
話アリ請フ君ノ為メニ之ヲ読ラン肩輿ニ駕シ石橋山下ヲ過
ルトキ余カ肩夫路傍ノ梅花一枝ヲ折リ来リ余ニ贈テ曰
リ願クハ貴賓ニ之ヲ呈セン幸ニ之ヲ納メヨ且ツ奴ヲ賞スルニ
一首ノ俳歌ヲ以テセヨト余欣然墨汁ニ命シテ野生よハこの
わりあつしき梅の花ト草シテ与フ輿夫大ニ喜色アリ
曰リ奴微賤ナリト曇モ首ヲ試ミン冀クハ貴賓ノ是正ヲ
得ント則チ斯ク「いのまゝにおもいたし梅のゆえらさ」
余激賞止マス為メニ金銭ヲ贈テ之ヲ賞ス彼レ又一首ヲ詠ス
曰リ箱根山枯木ニ雪ハ積れども我ガ手を包めバ夏の装束
云ヽ余聞テ哂テ曰リ君ノ行ニシテ此佳話アリ小説家ノ旅行

ニ背ヲスト坏兄欣然得色アリ忽チ入リ小雨又紀行ヲ草シテ
在京ノ友人ニ寄ス
九九日　雨収、坏兄余ヲ訪フ穂積兄亦タ来ル此日初メテ澤
辺春水、井上田子、川口宗時諸兄ノ鈴木屋ニ在ルヲ聞キ相
携テ訪フ井上兄淹留間ノ詩数篇ヲ示ス夕陽諸子ト街中
ニ散歩シ海濱ニ出テ、馳眺ス右ニ奥見岬ノ突出スルアリ左ニ横磯ノ
岬遠クシテ鼎鶴岬アリ左右相抱テ灣ヲ為ス前面ニ当テ一帶
ノ翠黛アルハ初島ナリ之レヲ柳北仙史ノ紀游ニ聞リ此島風
俗淳樸別乾坤ヲナシ往々笑フヘキノ陋習ヲ存ス島内ニ一
大石アリ島民ノ有夫女ヲ行ナフ者若シ発覚スルアレハ男
女共ニ奔逃シ去テ其石ヲ抱ク既ニ其石ヲ抱ケハ本夫モ其
罪ヲ恕フヲ得ス土人尽リ其然ラサルトセスシテ止ムト之レヲ
聞リ唐土溟中ノ緬甸ロニ緬鈴ト云フ石ヲ出ス其大サ龍眼
肉ノ如リ人体ノ温氣ヲ得レハ自然ト動揺シテ止マス彼地ノ
婦女之ヲ以テ閨房ノ玩具トナシ一時日本ニ船載シ来リ
王公貴人ノ手ニ上レリト嗚呼石何ソ其質ノ堅硬ナルヲ背
リヤ然リト雖モ天下名実ノ相副ハサル者豈啻タ石ノミナラン
ヤ海濱ヨリ左ニ轉シテ十皇アリ天神山ト云フ志る粉ヲ鬻
リ家アリ入テ憩フ婢子出テ、接ス媚諛厭フヘシ聞ク四五年
前北家ニ私窠子ヲ置キ官ノ督責ヲ受ケタルヿアリト
其家ノ結搆ヲ見ルニ其然
ハ其遺物ニアラサルカ

廿日 晴烈風 曉起隣房ノ客ヲ伴フテ前街ニ散歩ス帰リ来レバ坪渡両兄アリ未タ語ヲ交ユルニ至ラス坪兄一詩ヲ吟ス

坐辺留主国無聊主人帰遅体屈生只談種尽二階上只聞自分鮑微聲

金絶倒ス杯盤ヲ命シテ卯飲ス夜ニ入リ坪兄ヲ伴フテ露木楼ニ至ル楼海ニ面スルノ一高楼アリ最モ眺望ニ富ム偶々月魚見岬ニ上リ寒陰微明斜メニ曲湾ヲ射テ観アリ感激賞止マス

楼架滄溟咫尺間最宜清夜古迷悰濃雲微従弦月料

鑠々金蛇奔曲湾

廿一日 晴風漸無力 諸友ヲ誘フテ魚見岬ニ登ル岬ハ熟海湾左翼ノ極マル所上ニ小祠ヲ安キ側ラニ小茅舎アリ漁夫常ニ此ニ起臥シ魚ノ集マルヲ視テ網ヲ投スト蓋シ名アル所以ナリ盤根ニ踞シテ東望スレハ豆ノ諸岬犬牙ノ如ク海面ニ列シ長キアリ短キアリ廣キアリ細キアリ皆ナ鬱々紫色ヲ帯ビ茫々トシテ其際涯ヲ極ムヲ可ラス西眺スレバ七島鞆鞨海雲ノ間ニ出没シ白帆歇側シテ初島ヲ過リ風光自絶今夜除夜ニ属ス在京ノ香遠半棒二兄ヨリ信書ヲ得書中余カ露木楼ニ宿セサルヲ詰リ早リ居ヲ彼ニ移スヘシノ文アリ兄往年此地ニ趨ヒ露木楼ニ宿シ同楼ニ親故多ケレカ故ナリ半棒兄カ余ヲ詰ルノ書ニ曰リ「君坂ニ居ラスシテハ

奥村の梅し久寐の海常ゝ遍近覚来す其上海京
ゝ立法紙僕と会うぶく法くふ都会る寄ゝ孔くゝ連ゝ
宿を寄来ゝ指しあくし又曰田楼ゝオ六ナル箇アリ快閑
良り談ス共ゝ語りテ悶ゝ遣ハヘシト乃チ人ゝシテ箇ゝ招ア
シム在ラス其故ゝ悶のへい客歳悪疫ゝ罹リ已ゝ鬼籍ゝ上シリ
ト之ゝ聞テ一坐悽然四識ゝ失フノ感アリ
元旦　好晴ナシ風アリ今朝歳首ゝ偏スルゝ以テ東窓
ノ白キゝ待テ乃チ起リ松柏春ゝ表シ街市洒然楼主正服喜
酒祝饌ゝ薦メ相賀ス客中年ゝ迎フ尚ゝシテ却テ快ナル
ゝ覚ユ飯後諸友来リ會シ余ゝ訪テ相賀ス皆満面紅ゝ
潮シ談話活潑又常ゝ異ナリ伴フテ露木楼ゝ至ル金曰リ

古人云フアリ一日ノ早朝ニアリ一年ノ事ハ歳首ニアリト余輩今
皆ナ春秋ゝ富ム宜シク跌宕豪壮ノ氣ゝ養ヒ事アルノ日ゝ
備フヘシ而シテ之ゝ治ス今年今日今朝ゝ以テ初ムヘシ
此ノ良辰ゝ徒過ス可ラサル也顧フニ余等此地ゝ来リ既ニ一週ゝ
無シトス而シテ未タ勝迹ゝ探ラス豈ゝ心ゝ赧然タル所ナ
ナランヤ冀クハ今朝ゝ以テ舟ゝ泛ヘテ初島ゝ趨ハント川口
兄先ツ之ゝ賛ス諸兄亦タ共ニ奮テ趨ハントス乃チ楼婢ニ
余シテ漁舟ゝ備ハシム篙師来リ報シテ曰リ今朝風潮是
シリ船遣シ可ラス請フ明晨ゝ待テト衆皆望ゝ失ヒ或ハ
風波ゝ衝テ趨ハントス云ヘ或ハ夜ニ入リ風潮ノ静ナルゝ待ゝ発
セント云ヘ勢勃然亦タ制ス可ラス余曰リ勉海ノ勝迹何ソ猶

り初島に限うて従是細代港に至る沿海快巖峻嶺景物異趣多しと請フ行テ赴ハン請元皆ナ諾ス乃チ小舫に駕ス篙師四人相呼ムテ発ス銀濤洶々舟波に随テ上下ス魚見岬ヲ離るしハ眼境廣り乱嶋點々瀾濤に随テ或ハ高り或ハ低り水煙暁霜に和シテ或ハ前岸ヲ見或ハ失フ恰も好し便風帆に飽キ舟駛スル一矢ノ如ク霎時錦浦に至る此沿岸ヲ総称シテ嵯峨ノ磯ト云断崖千尺奇卉錦ヲ織リ瑾瑤目ヲ奪フ其下餅然一巨窟ヲ為ストコロヲ名ケテ錦窟ト云フ篙師棹ヲ回シテ舫ヲ寄セレトス激浪に乗じ入ラレトシテ退リ数次目瞠シテ坐ス能ハス漸リニシテ波濤ノ呼吸穏カし舟躍テ巖石に達ス衆跚戦ヲ脱し巖石ヲ履ムテ窟内に入る石海水に浴シテ滑澤足ヲ失セントス窟中冥暗其奥ヲ詳カニスル能ハス中に小池アリ清水ヲ湛ス池ヲ隔テ一岩アリ金仏像ヲ安ス光彩赫灼目ヲ射ル只タ冷氣骨に沁シ久シク駐マル可ラス急に篙師ヲ促シテ発ス窟口ノ左海面に突出シタル岩石アリ斜メに洞窟ヲ為シ舟ヲ通ス洞ノ内外奇章蒙羅シテ菌ノ如ク日光之レヲ射シハ反照奇彩ヲ呈スト云フ偏々曇雲日ヲ蔽リ其奇観ヲ見ル能ハサリキハ遺恨ナリ此巖石に倚テ突起シ峨形ヲ為ス者ヲ峨岩ト称シ巖面霰ノ如キ紋アリ逆リ飛ハレトスルカ如キモノヲ霰石ト云一々名状し難シ舟東ヲ作レテ進行ス帆檣林立個代港目皆に在リ風サシク収マリ波静ナリ井上先侍アリ

岸頭盡處水成灣望裏送迎数点山海路一条随錦浦

舟過松影浪光間

網代ハ豆州良港ノ一ニシテ船ヲ泊スルニ良シ然レトモ連壁漁家ニシテ皆ナ貧窶、往攝又タ甚タ野鄙ナリ一酒店ニ入リ一酌ス家屋陰晦不潔時ニ娼妓ノ紙障ヲ隔テ、語リ暗ニ客ヲ引リニ飲タルアリ厭フヘシ與情頓ニ消シ酒客余カ去キヲ又一舩ヲ傾クルヲ得ス興ニ辞シ去舟ニ帰ル帰路又順風ヲ得一瞬熟海ニ帰シハ坪渡二兄迎ヲ海岸ニ在リ余カ富ニ諸友ヲ舎シテ痛飲ス

二日　風未タ歇マス在京ノ愛川根堂二兄ヨリ信書ヲ得共ニ詩歌アリ今コヽニ録セス朝餐終リテ坪兄ヲ伴ヒ沢辺川口菁洲兄ヲ訪シ却飲ス酔氣豪ノ時ニ穂積兄来リ報シテ曰ク余同宿ノ客ト謀リ歌牌ノ雅戯ヲ開カントス諸君之ニ臨ムノ意アリヤ否ヤ余先ツ問テ曰ク名婢ノ来リ舎スル者アリヤ曰ク在リ芳醇アリヤ曰ク在リ余カ曰ク好シ既ニ此二者アリ余カ事足ル牌戯ノ雅興アルヲ要セヾト相携テ鈴蕉木ニ至ル蓋シ此郷婀娜婢ヲ以テ名アル名娘四アリ曰ク奥村光曰ク櫨田高曰ク露木正曰ク寐絲皆ナ妙齢破瓜未タ芳津ヲ通セサルノ處女ナリ就中光丝両女最モ艶冶俗客ノ儒目スルトコロトナル而メ今糸ヲ失フ惜ムヘシ往年大学ノ同交露木ニ宿シ阿正ヲ伴シテ一タビ雅戯ヲ開テヨリ再来例ヲ為スニ至リ是

レ去堂獨リ擅ニスルノ雅與ナリ相約シテ曰リ今日ノ優劣
勝敗ハ歌牌ニアラン先ト伍ヲ為ス者ヲ以テ魁トス（世俗歌牌ヲ博スル柚戯ト倡ヲ定ムルコトアリ）則既ニシテ樓蝶報シテ曰リ請
フ階下ノ席ニ就ケト全蕚其故ヲ穂積ニ糾ス兄笑テ曰リ
雅戦律アリ尤婦之レヲ督シ漫リニ掌膝相摩シ翠鈿
碎ケ紅釵折ルノ惨状アラシメス然レ氏色授眉典巧ミ
ニ情ヲ通スルカ如キハ律ノ禁スルトコロニアラス諸君幸
ニ安ンセヨト衆笑テ階ヲ下ル名娘已ニ坐ニアリ端然トシ
坐ヲ占ノ靚粧綺服姿容楚々タル者先ナリ相並ンテ婀娜
嬌靡人ヲ悩殺スルモノ亭亭ナリ芳容窈窕恨ムルカ如ク恥
ルカ如キ者亦ナリ坐定マリ伍ヲ定ム先ツ先ト伍ヲ為ス者枕

浪子ナリ余豈ニ本意ナランヤ向終リテ更ニ伍ヲ改メ再
ミ先ト伍ヲ失ハス蓋シ又奇縁ナル哉衆艷福ノ處ニ聚ル
ヲ恨ミ不平止マス或ハ默シテ憂フル如キ者アリ或ハ喋
喋辯ヲ唱ヒ晴ニ嫉ム者アリ或ハ慎ニ好堪ヘス事ニ托シテ
脱カヲ美スル者アリ滿堂紛然喧噪云フヲ可ラス又メ一
日ノ快事ナリ坪穂二氏三人ヲ許スノ和歌アリ

八束

手折来てうめの人ゐるこらをゝ越海の奥ゑ咲ける梅
我立ハ富士の高根の雪ゑ見て初てゝ積るかなしも
思ひきや伊豆の越海ゑ湯ゑ来て都ゑ帰るまぼろしとい

比左古

谷ふかく傳ひしうるはしの花
うつくしく尾上に咲る山桜
ひとりうとき高き梟と

三日　鈴木楼に会して日金山に登うつて議す疾風の
阻る所となり早サス
四日　坪内井上穂積川口澤辺諸兄と帰京の程を上る
小田原に一泊して五日京に帰る帰路特記すべき事なし

余ノ高田ニ來ルヤ家ヲ下越ニ省セントスル日アリ只タ筆硯ニ忙シキル過月奇觸ヲ攻壇ニ獲タルトヲ以テ身已ニ有ニシテ已之ヲ自由ニスル能ハス此裏家園ニ徜徉シテ消光スル于茲數旬然ルニ客月下澣初メテ機會ヲ得官府ニ旅行ノ允許ヲ乞フ十旬日歸省ヲ爲スヿヲ得タリ此行ヤ政治上ノ事ヲ周旋スルニ非ス社務ヲ斡旋スル爲メニ非ス單ニ自家ノ私用ヲ辨スルニ過キサレバ二旬ノ時日多シハ私事ノ爲メニ消シ紀行又私事ニ關スル者其多分ヲ占ム固トヨリ世ニ公ニスヘキ者ニ非スト雖モ又下越ノ風土人情其他政治上ニ關スル事項幾分カ之ヲ記キニ非ス即チ今日乘中此般ニ關スルモノヲ摘録シテ江湖ノ瀏覽ニ供セントス若シ下越風土ノ一班ヲ知ルニ足ラバ余カ此稿ヲ起スノ勞又タ書餅ニ屬セス明治十六年七月十八日

市島謙吉識

六月二十三日　午饗畢リ知友ニ別ヲ告ケテ程ヲ啓ク偶々高田中學校教授小坂駒三郎之志改進黨員馬場平次郎二君余ヲ送テ五智ニ到ラントス即チ相携テ呉服町ヲ發ス高田ヲ距ル半里曠野一望ノ所ニ出テ一丘阜ノ眼ヲ遮ルヲ望ム馬場君指シテ曰ク是レ上杉謙信ノ城址春日山ナリト一々其勝ヲ說テ舍カス余平素山癖アリ遊清頓ミニ勃興シ登リ見ントス小坂君ヲ顧ミテ之ヲ謀ル君又タ興ニ遊ハンコトヲ欲スト則チ國分村ヲ曲折シ道ヲ田間ニ取リテ行ク數丁ニシテ道稍々險ナリ人車用ユ可ラス車ヲ捨テ相呼ンテ與ニ登ル（未完）

山ノ半腹ニ一小店アリ四圍ノ勝概ヲ半視シテ眺瞥殊ニ住ナリ與ニ入リテ憩フ店主余等カ爲メニ酒饌ヲ設ケ且ツ地圖ヲ展ヘ滿目ノ地形ヲ歷指ス曰ク某丘ハ固ト兵馬ヲ訓練セル所、其境ハ嘗遠ノ地、某所ハ城壁ノアルトコロ某地ハ何、某ハ何丁寧說示ス洽桑ノ變、地舊態ヲ存セス往時ヲ想像ス可ラサル者

多シ之ヲ聞ク往時源義家奥羽ヲ征討スルヤ此地ニ據リ山ヲ命シテ蜂ヶ峯ト稱セリト蓋シ日之ヲ嚙ミ尾之ヲ刺ス天險ノ地位ヲ占ムルヲ以テ孫子ノ所謂常山ノ蛇ニ擬シ命シタル者歟後上杉氏此ニ城スルニ至リ春日神社ノアルヲ以テ其名ヲ山ニ命シ今ノ名アリト屋後枯井アリ周圍壹常ノ者ニ五倍ス半ハ棧橋ヲ架ス試ミニ渡リ瞰ル其深サ幾仞戦栗慄ヲ寒カラシム久シク停ル可ラス相促メ一高阜固ト大主倉ノアル所ニ登テ馳眺スルニ極目際ナク遠ク米峯櫛崎近ク眺ハ高田直江津ヲ平視シ官衙ノ道ハ繩ノ如ク城邑市井ハ蟻蜂ノ集ルカ如ク皆ナ寸目中ニアリ西顧スレハ群巒相圍ミ城址ト脈ノ絶ツ所ハ五谷ヲナシ黛相翠松谷ヲ埋ム天風時ニ來レハ瀟々飆牙相戛スルノ聲ヲ生シ坐ロニ往時ヲ追懐セシム馬場君西方ヲ指シテ曰ク是レ所謂西嶺ノ七谷ナル所ナリ一ニ曰桑取二ニ曰名立三ニ曰能生四ニ曰早川五ニ曰東海六ニ曰根知七ニ曰西海ト此七所ノ天險後ヲ擁ス之ヲ蛇ノ尾ニ比ス誠ニ故アルカナ英雄ノ起ル所地形好シト此地天險アリ固ト守ルニ便ナリ只タ一利アレハ一害ノ之ニ從フハ免ル能ハサル所ナリ守ルニ便ナル所必ス運輸ニ便ナラス移遂ニ直江津ノ東福島ニ移スニ至リタリト著々往時ニ遡リテ追懐シ來レハ躊躇去ル能ハス顧ミテ曰ク余カ感慨常人ニ倍スル者實ニ故アルナリ抑モ元弘建武以來武臣驕傲元龜天正ニ至リ朝廷ノ威嚴質ニ地ニ墜チタリト謂フ可シ此際霜公ノ武略能ク王家ニ勤ムルニアラサルヨリハ豈ニ頽勢ヲ挽回シ得ンヤ余カ如キ王室ノ尊榮ヲ司リ夙夜忘ラサル者如何ンソ此城址ヲ訪ヒ霜公ノ偉蹟ヲ追想シテ慷慨ナカランヤ頃日有志者資ヲ募リテ公ノ像ヲ鑄テ永ク偉蹟ヲ傳ヘントスト余ハ先ツ之ニ贊成ヲ表シサルヲ得ス

午后二時ヶ店ヲ左ニ折レ紆經ヲ辿曲シ林泉寺ニ抵ル

（未完）

二十五日　快晴小坂君ト袂別シ君歸高ノ途ニ就キ余長岡ニ向フテ去ル青海川ヨリ長岡ニ至ル十余里午時長岡ニ至リ午後二時發ノ瀛船ニ駕シテ新潟ニ至ラントス柏崎ヨリ道路少シク險ナリ馳車意ニ任セス曾地ニ抵ルトキ既ニ一時ニ近ラントス而メ前途尚ホ二里ニ遠フシ余蟹船ノ刻ニ後レンコヲ思フヤ車夫一人ヲ傭ヒ車ヲ馳ス而メ長岡ニ達スレハ既ニ二時ヲ過キ瀛船已ニ發ス余ノ遺憾知ル可キナリ止ムコヲ得ス增屋ニ投ス客窓無聊半日ノ光陰消スルニ由ナク一篇ノ文ヲ草シ社員ニ寄セ僅カニ悶ヲ遣ル偶々同窓法學士坂口佐吉當所ニ在リト聞キ訪ハントス來客ノ爲メ遂ニ果サス

二十六日　午前五時信川丸ニ駕シテ長崎ヲ發シ午後二時新潟ニ着小山長作氏ニ投ス偶々知人中野平彌同ク此家ニアリテ寓ス君ハ當時安然社（瀛船會社）ヲ幹理スル人ナリ相遇フテ共ニ久情ヲ語ル君余カ爲メニ新潟ノ近況ヲ語リ且ツ頃來瀛船會社頻リニ起リ爲メニ軋轢競爭ヲ生スルノ狀ヲ說ク頗ル密ナリ余書ヲ新潟日新社佐瀬精一枝元辰二君及三菱會社々員內藤於蕙彥君ニ寄セ着港ヲ報ス既ニシテ來リ訪フ者アリ見レハ卽チ日新社里村太利君ナリ余初メ高田ヲ發スルヤ君新聞條例ニ觸レ囹圄ニアリト聞ク而メ已ニ婆娑塵裏ニ在ルヲヲ知ラス既ニ相遇フテ互ニ相驚ク同病相憐ムハ固トヨリ其理余輩カ歡常人ノ雅シ得可ラサル者アリ里村君曰ク久情一場ニ盡シ難シ請フ佐瀬枝元二氏ヲ誘フテ閑靜ノ處ニ至テ語ラン則チ相携テ先ツ日新社ニ至ル日新社寺町ニ在リ巍然タル三層樓卽チ是ナリ入テ佐瀬枝元其他編輯員諸氏ニ逢フ只其ニ頭ヲ擡テ所頃ハカ互ニ迷惑千萬ト言フノミ社員ニ導カレテ一覽ス第一層樓ハ編輯局第二ハ植字場第三ハ事務局ナリ卽チ第一樓筆ヲ起シ第二ニ至リ之ヲ植字印刷シ最下樓ニ至テ之ヲ售發シテ市中市外ニ遍シ其結構分業ノ法彼ノ歐羅製紙所ニ於テ幾層ノ高樓其第

一層樓ニ至レハ只ニ汚穢ノ斷巾片紙ヲ看而メ第二第三層樓等ノ機械ヲ經テ最下樓ニ至ルニ及ンテハ良好美麗ノ紙ヲ發售スルト同一般ナリ社務ノ周備思フヘシ佐瀬枝元里村二君ト相扶テ對酌ス玆ニ於テカ談論交々起リ或ハ鉄窓木欄ノ苦楚ヲ談シ或ハ時事ヲ慨歎シ酒已ニ酣ニメ談論愈々濃ニ坐ニ翠紅繽ノ和クルナク殺氣滿樓ニ飛フ夜ニ入リ辭シテ相別ル實ニ近來ノ一快事ナリ

（未完）

二十七日　晴、此日滞留港地ニアリ午前枝元氏ト相扶テ白山議事堂ヲ見ル堂公園ノ西隅ニアリ面積凡ソ二百坪ニ充ツ西洋築造ノ三層樓ナリ建築未タ全ク竣成ニ至ラスト雖モ壯麗萎シ縣下西洋築造ニ冠タルヘシ堂ノ中央ニ議場アリ廣サ凡ソ四五百人ヲ容ルヘシ議場ノ中段ニ廻廊アリ傍聽席ヲ設ク結構略ホ東京明治會堂ト相似タリ二階ニ縣令、縣官、議長、議員等ノ室アリ二階ノ下ニ事務局アリ共ニ宏大壯麗觀ルニ足ル只惜ムラクハ議場天井ノ結構其當ヲ得サル者ノ如ク言語反響ノ聲甚大ナルノ弊ヲ見ル議事ノ際幾分ノ妨トナルヘシ聞ク此堂ヲ建築スルニ要スル所ノ經費三萬三千圓ニ下ラズト費用亦大ナリト謂フヘシ一覽終テ公園地内ニ漫歩渉リ茲ニ十年此勝ニ背クコ久矣ムテ共ニ行カンコシ借樂館ニ憩フ館信川ニ臨ミ遙カニ青黛一抹彥山ヲ諾ス日和山里村君ノ家ヲ距ルコ七八町沿路市街ヲ望ム壯觀謂フ可ラス午時枝元氏ニ辭シ歸寓ス偶ノ景狀營遊ノ時ト異ニ日和山ノ高臺亦タ前年ノ祝々知友某氏來リ訪フ余語次問フニ本年縣會ノ情況融ニ罹リテ營觀ヲ存セス今ハ一高臺ヲ營地ヨリ更ヲ以テス氏余カ爲メニ之ヲ說ク甚タ密ナリ蓋シ實ニ海ニ近キノ所ニ設ケ眺望却テ美ナリ海邊ノ一酒際ヲ說ク者ナルヘシ余之ヲ忘却スルヲ欲セス今其樓ニ登テ浴後一酌ス又以テ一日ノ塵懷ヲ洗滌スル問答ヲ記シ紀行中ニ登錄セントス

ニ足レリ

（未完）

廿八日　早起結束將サニ途ニ上ラントス偶々里村君來訪セ余カ爲メニ港地有志ノ士ト謀リテ縣親會ヲ開カンコヲ告ク余曰ク謹ンテ厚志ヲ謝スト雖モ此行ヤ固ト私事ノタメニ奔走スルニ在リ且ツ身保釋中ニメ旅行ノ期日亦限アリ冀クハ他日同志ト共ニ來ルノ日ヲ期セン里村君曰ク君ノ情實ニメ然ラハ止ムヲ得ス唯タ余カ家眷ノ君ヲ看ルコヲ欲スル切ナリ冀クハ余カ爲メニ一日ノ滯留ヲ諾セヨ里村君ノ辭甚切ニメ亦辭ス可ラス卽チ午後里村君ノ家ニ至ランコヲ約シテ相別ル余栗林重三郎氏ヲ神明節ニ當ラサルナク一夕ノ親睦殆ント舊識ノ感アリ詞前ニ訪フ氏ハ固ト余カ家人ナリ幼壯ニメ貨殖ノ才ニ富ミ既ニ晩年ニ及フト雖モ氣力尙ホ壯者ニ倍シ現ニ港地ノ紳商タリ談話刻ヲ移ス語々實際ニ出テサルナク而メ其往時余カ先人ノ事ヲ說クニ及ンテハ更ラニ戒箴トナス可キ者多シ午後寓居ニ歸レハ一片ノ名刺アリ婢示シ且ツ曰ク新潟新聞社員和氣清太郎氏過刻來訪フト余未タ和氣氏ト面識アラス行テ訪ハントス而メ里村君ト約スルノ時已ニ至ル和氣氏ヲ訪フヲ再來ノ日ニ讓リ先ツ里村君ヲ訪フ君余ヲ迎ヒ且ツ曰ク佐瀬君其他未來ラス請フ先ツ日和山ニ至テ暫ラク時ヲ移サン日和山ハ海邊ノ一丘地ニメ新潟區内ノ勝地ナリ余東京ニ遊ンデヨリ久シ

六月廿八日（續）　夕陽里村君ノ家ニ至レハ佐瀬君及ヒ里村君ノ兄弟既ニ來リ會シテ一室ニ在リ里村君余カ爲メニ筵席ヲ潔ク盛膳ヲ設ケテ饗ス余佐瀬君ト交々時事ヲ談シ興ヲ助ク佐瀬君溫辭善ク語ル里村君兄弟亦時事ヲ聞クニ熱意ニシテ應答一々應シ不日着港スト聞ク余君ニ就テ京地ノ近況ヲ聞カンコヲ欲スルヤ遂ニ歸鳳ノ途次再ヒ港地ニ來ランコヲ約シ諸氏ト袂別歸寓ス

廿九日　早起港地ヲ發シ五泉ニ赴カントス寓主ニ

就テ道ヲ問フ曰ク新潟ヨリ五泉ニ至ル道ヲ鮫田ニ取ルト小須戸ニ取ルト兩道アリ里程ニ於テ大差アラスト雖モ道ブ小須戸ニ取ル恐ラク便ナラン余其言ニ從ヒ第五時瀧觧信川九ニ搭メ發ス八時小須戸ニ上陸シ更ニ腕車ヲ倚フテ五泉ニ達スレハ午時ニ近シ和泉嚴吉氏ノ家ニ投ス氏ハ余カ緣家ナリ氏余カ來ルヲ欽ヒ余ヲ堂上ニ延キ曰ク余君ヲ待ツヿ久矣奚爲レソ來ルノ甚遲キヤ余語ルニ繫獄ノ厄ニ阻ラレタルヲ以テス由テ大ニ獄裏ノ若楚ヲ談ス氏爲メニ酒膳ヲ設ケ且ツ呑ミ且ツ談ス語頭轉シテ政黨ノ事ニ及フ氏曰ク冀クハ余カ爲メニ立憲改進黨ノ主義綱領ヲ講セヨ余卽チ趣意書ヲ出シテ一々解釋ス而メ王室ノ尊榮ヲ說クニ當テ氏俄然容ヲ改ム余怪ムテ之ヲ問フ氏曰ク余ノ容ヲ改ムル君ノ講談ヲ聞クカ爲メニアラス事王室ニ關ス豈ニ肅然容ヲ改メサルヲ得ンヤ是レ實ニ王家ニ敬禮ヲ盡スナリト余大ニ其言ニ服ス

（未完）

廿九日（續）故和泉久寛君住一ト通稱ス嚴吉君ノ養父ナリ天性勇邁豪毅愛國憂世ノ情ニ篤ク常ニ幕府ノ專横ヲ慨憤シ外寇ヲ攘ハンヿヲ欲ス藤本鐵石ハ慷慨激昂ノ人ナリ嘗テ北越ニ來遊スルニ際シ偶々和泉氏ニ投ス住一君語ルニ當世ノ事ヲ以テス其見ル所鐵石ノ見ル所ト符節ヲ合ス於是乎意氣投合シ其交一朝ニノ舊識ノ如キ者アリ鐵石去リテ京師ニ赴ク後ト雖モ往復常ニ絶ヘス後文久年間君大ニ時事ニ慨スル所アリ意ヲ決シ妻孥ヲ棄テ、上國ニ遊フ幾何モナク鐵石、松本謙三郎安積五郎等ト幕議ノ因循ヲ憤リ前侍從中山公子忠光ヲ奉シテ兵ヲ大和ニ擧ケ五條ニ據ル時ニ住一君伊勢ニ在變起ルヲ聞クヤ往テ援ケントス單身晝夜ヲ兼テ行ク而メ至レハ五條既ニ陷リ藤本松本等皆戰死シ中山公子長州ニ奔ルト聞ク君ノ遺憾知ルヘキナリ君於是乎時勢ノ大ニ察セサル可ラサル者アルヲ洞觀シ遂ニ京師ニ客居シ水戸ノ脫士黑澤仙次郎、柴田源太郎、紀藩里見次郎等ト竊カニ相結ヒ大ニ圖ル所アリ時偶々長藩征討ノ議起ル君慨然諸士ニ其得策ニ非サルヲ切言シ爲メニ一篇ノ建議ヲ草シ里見二郎水藩芹澤又右衛門菅谷八次郎、黑澤仙次郎等ヲ爲メ齎ラシテ尾張ニ至リ前大納言ニ奉ラシム大納言大ニ納ル、所アリ蓋シ住一君ノ力其多キニ居ル後鄕里ニ歸リ戊辰ノ歲勅使降臨ノ時ニ當テ君又米澤侯ニ書ヲ呈シテ會津ヲ討スルヿヲ說ク而メ其書過テ會津侯ノ手ニ落チ遂ニ一時獄舍ニ繫ル、ニ至レリ然レトモ固ト大義ヲ唱フルノ衷情ニ出テタルヲ以テ終ニ禁錮ヲ解カレ朝廷大ニ勞スル所アリ明治四年沒ス君嘗テ獄中ノ作アリ曰「みとり人何をよな〳〵まもるふん曇あき身い夢すか〳〵」今ノ和泉若蓋シ亡大人ノ遺志ヲ繼ク者ナリ其勤王ノ情ニ切ナル何ソ怪ムニ足ラン

（未完）

三十日　晴、滝澤和泉氏ニ在リ當地ノ有志者雛田千佳良（五泉校教授）大橋富作、水野禎三（立憲改進党員）村山武則ノ諸氏來リ訪ヒ余カ高田繫獄ノ不幸ヲ慰問シ且ツ余ニ所ノ二時事ヲ以テス余各政黨ヲ評論シテ遂ニ政党ニ依ラザレハ政治ノ改良前進ヲ期ス可ラサル事ニ及フ諸氏皆曰ク是レ余輩獨リ聞ク可キノ談論ニ非ス請フ明日ヲ俟テ一懇親會ヲ開テ衆ト利益ヲ共ニ與ニセン冀クハ臨場ノ勞ヲ厭フ勿レ余曰ク有志諸君ト面接スルヿヲ得ルハ余カ甚タ冀望スル所ナリ然レトモ此行ヤ私事ノ爲メニ奔走スルニ過キスメ既ニ新潟ニ懇親會企圖アリシ時之ヲ以テ辭セリ有志諸士ノ來訪ハ余切ニ之ヲ冀望ス懇親會ヲ殊ニ設クルノ事ハ請フ止メヨ諸氏重テ請フテ止マス偶々私事ノ爲メ明日滝留ヲ要スルヿ生ス於是乎遂ニ諸氏ノ意ニ任ス大橋、水野二氏ハ學事ニ鋭意熱心ナル人ナリ余ニ告クルニ日ナラス學術研窮會ヲ起シテ學事ノ振興ヲ計畫センヿヲ以テス余嘗テ高田人士ト謀リテ學術研窮會ヲ起シテ政治法律等ヲ講習ス依テ大ニ其擧ヲ贊成シ其組

織規約ノ意見ヲ述ヘ且ツ將來高田學術研究會ト氣脈ヲ通シ余カ講述ノ筆記ヲ送リテ參考ニ供センコトヲ約ス此會ニハ其礎定マルニ至ラハ蓋シ同地學事ニ益スルコト大ナラン

（未完）

七月五日ヨリ九日ニ至ル此間中條、本郷、西條ノ

人須貝四平、須貝福三郎、丹後宗淳、丹後良平、丹吳俊平、小菅喜一、村山長太郎諸氏ト往復スルノ外時日多クハ私事ニ消盡シ殊ニ錄スヘキ者ナシ諸氏余カ爲メニ一大懇親會ヲ中條ニ開カントス九日ヲ會期ト豫定シ大ニ司畫斡旋スル所アリ而メ余之ヲ知ラス之ヨリ先キ余水原諸友ト此日ヲ期シテ水原懇親會ニ臨ムノ約アリ而メ當日將サニ程ヲ啓キ水原ニ赴カントスルニ附シ初メテ中條懇親會ノ事ヲ聞ク然レトモ水原諸友ノ約背ク可ラス卽チ他日來遊ノ日ヲ以テ中條諸氏ノ厚待ヲ受ケンコトヲ期シ深ク諸氏ノ厚志ヲ謝シテ袂別ス余ノ遺憾知ルヘキナリ

此日午後水原ニ至リ市島文吉氏ノ家ニ投ス諸友來會ス既ニ夕餐淵ニ沒シ懇親會場ノ整理成ヲ報ス卽チ相携テ外城、大雲寺ニ抵ル大雲寺瓢湖ヲ一望ス瓢湖周回凡ソ一里固ト繞ラシ植ユルニ櫻樹ヲ以テス花時ニ際スレハ白雲紅樹鏡裡ニ湧キ風光佳絶實ニ閑卿ノ勝地タリ往年故アリテ之ヲ裁伐シ今一樹ヲ存セス滿目悽然坐ロニ往事ヲ追懷シテ止ム能ハサラシム會場ニ入レハ佐藤安、羽田野文藏、小田島儀一郎、安孫子石太郎、大澤豐太郎、武者春道、佐藤伊三郎、宇尾野藤作、市島久三郎、仝文吉等ノ諸氏既ニ來リテ座ニ在リ余カ至ルヲ待ツ者ノ如シ團欒話ニ入ル既ニ メ饗饌ノ布置成リ主客膾襟ヲ開テ往事ヲ語ル諸氏余ニ於テ竹馬ノ交アリ往事ヲ談論スルノ快外人ノ推量ス可ラサル者アリ安孫子羽田野二氏坐上余ニ寄スルノ詩アリ今茲ニ錄セス余諸氏ト親睦ヲ永ク全フセンコトヲ欲スルヤ諸氏ノ組織ニカヽル精義社ノ社員タランコトヲ約シ深更散會ス余明日五泉ニ至リ滝留一日十二日新潟ニ赴テ箕浦勝人氏ノ來港ヲ待ツコト三日氏至ルニ會シ黨派ノ事ヲ談シ十七日終ニ高田ニ歸ル

（完結）

以下全て

白　紙